手につくる利用者像に相談者を当てはめない。もう一つは専門職である前に、人間であれ！ということです。利用者の人としてそこに至るやむにやまれなかった理由、事情、悩みの姿をしっかりと捉えることです。

また、新しい公共で考えられるのは、ダイバシティとインクルージョン、多様性と共生の理念をどう認めるのか？　そこは単に高齢者、障害者はという議論ではなく、住民のAさんという議論で進めていかなければならないと思いますね。

例えば、家という物理的な形状ではなく、そこに人間が住み、一人ひとりの思い、存在、誇りを見失ってはいけないし、もしそういう希望を失っている人がいたなら、希望を届けていく、一緒に歩んでいく存在、そういうように人として関わっていく。それが「縁」であって、血縁・地縁が乏しくなったら新しい縁を作っていく…。それが大事で、SWはそれを結ぶもの。つまり人間理解、そして個々人の可能性、生きていく将来への道、それぞれが抱く希望と思いに寄り添っていくことではないでしょうか。

●SWにリフレッシュの場をつくる

松本　すごく大事なことだと思います。SWがもしかしたら、人を見てなくて、お金を見ていないか？　貧困を救うには法律を作ってもらおうとか、それも大事ですが、現に苦しんでいる、喘いでいる人が見えなくなったワーカーが増えると怖いと思います。

市川　SWがそうならざる理由があります。例えば複雑困難な問題とか、一人では手に負えない、利用者の解決困難な生活の問題、自分自身がある意味で渇いている…ある大学院生は、児童養護施設で働いていると子ども達に自分の心の愛や、やさしさが吸い取られてしまうので、充電するために大学院に来ていた。燃え尽きる前に一人で抱え込まずに共に支え合う、共に歩む、充電する、リフレッシュする場を提供していくのが私の役割と考えています。

松本　大事な役割ですね。今SW自身が仕事に疲弊して、人が見えなくなっている現状を見るにつけ、私も危機感をもっています。今の先生の話を聞いて、この状況を何とかできるのかな、というヒントをいただきました。

市川　権利擁護センターの苦情対応とか、生活福祉資金貸付の職員たちと話をすると、できないとか、辛いとか、例えばAさんが援助してもなかなか改善しない、うまくゆかないんだと言う。改善は遅々たるものでもその人がそこで何とか生きようとしている姿は、援助が成功している、関わりがいいことなんで、それは凄いことなんだと伝えてあげるのが、私の役割であり、周りの人の役割でもあります。もがきながら何とかやっている人を支えていること自体が、SWとしての成功じゃないかと私は思いますね。

松本　今思うことは、SWが成長していくには、時間がかかることをちゃんと伝えていきたいのと、うまくいったか、行かなかっただけではなく、何かが起きたときに、諦めないで、よし！　今度こっちからやってみようとか、しつこく出来るかどうかだと思います。それがソーシャルワークの実践だと伝えていきたいですね。

市川　それはどの分野でも言えることですね。先の私の「接ぎ木理論」をどう思いますか？

●「福祉は文化だ」が、福祉の考え方の原点

松本　高齢者の方々が利用されるある施設の例ですが、大きなお風呂と各個室にもお風呂を作らなければならないとしたところ、誰も個室の風呂に入らない。その理由は、その土地は温泉街で小さい頃から一緒に街の共同温泉に入ってきたので、特養に入っても自分ひとりでは風呂に入らない。「福祉は文化なんだ」ということを言われていて、そこが私の福祉の考え方の原点です。だから接ぎ木理論はその通りで、十羽一絡げではない。どれぐらいその文化を読み解けるか、その教育がSW教育にできていないと思いますね。

市川　その意味では靴に足を合わせるのではなく、足に靴を合わせる…相手に合わせた支援、地域活動をということでしょう。計画を立てた後に、それを推進する人や組織がいなければ、単なる言い訳になってしまう。私は多くの社協や行政と長期に関わっており、人材が育ち、将来に向かって重要な役割を担っていく姿をみる喜びがあります。

松本　とくに精神科医療機関の場合、非自発的入院がありますが、その人の意思にかかわらず強制的な入院が起こってきます。そこにどういう理想と現実があるかということは、ずーと辛いまま抱えてきています。とくに現場のPSW（精神科ソーシャルワーカー）はたいへん忙しく、考える時間もなくやっていかなければならないので、右のものを左に置くということをやらされている…それが辛い人が一杯いますね。

市川　それは精神保健の一つの特徴かもしれません。縁も大事だが、より医療の規定にあることが優先する…。

松本　地域もそうなのかもしれません。強制入院こそないが、はじかれたり、もっとがんじがらめに複雑に絡まっていて…何が起きているのか、見てみることができるといいと思うのですが…。

市川　一つは精神保健のソーシャルアクションの制度上の課題も出てくると思うし、そのアプローチも必要ですが、個別のケアプランがどうなっているか。病院を移ってしまったからやむを得えないという議論なのか。在宅の場合も含めて、足に靴を合わせるという議論が成り立つのではないでしょうか。

松本　とくに医療なんかが、そうなるべきですね。

●専門職が1本の木を植えてこそ！

松本　先生、最後に言い足りないことがあればどうぞお願いします。

市川　私が何を軸にして取り組んできたかという松本さんの事前質問の回答とした「1本の木を植えなければ砂漠の緑化が成り立たない」という文言は、アクションというか、当事者、住民、行政、社協等の関係者と共に制度政策を作るプロセスと、そのプロセスを通して地域が成長していく、ムーブメントとなることを大橋謙策先生から学びました。大橋先生にはたくさんの機会をいただき、研究者、教育者、実践者としての謙虚さも教えていただきました。

つまり、我々としてはやるっきゃない。専門職が1本の木を植えなければ、緑化が成り立たないということです。

松本　今回いただいた項目の中で、私はこの「一本の木を植える…」が一番好きです。福祉もそうだし、教育もそうだし、今の自分には物凄くここがストンと落ちます。